

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受記録第三五二號
昭和二十四年九月廿日印刷
昭和二十四年十月一日發行

第十五卷 第十號

浄土

十月號

法然上人法語 眞野正順

芙蓉合掌 吉田絃二郎

母の臨終 阿川貫達

選擇といふこと 増谷文雄

素顔の花

A新聞の連載小説「花の素顔」への多くの読者の反應はどうか。廿歳から四十歳位までの一般女性の評價は、壓倒的に「麻美」禮讀だという。その理由は明快で、美しい流行の服裝をし、旨いものを喰べ、男性と自由に遊び、それらに適わしい美貌と才智等々、こうしたもののえの羨望、——しかしそれとともに、もつと重要なことは、しかも麻美子は最後まで貞操を捨てない、非常に道徳堅固だという點が、讀者をひきつけているという。批評は種々できよう。この讀者心理はあまいしずるい。しかし、表面の行動はでたらめでも最後の點で道徳を守る、崩れてはゆくが崩れ切らない、どこか最小限の線でふみ止まることを期待するこの讀者心理の、そのもう一步の成長に、私は望みをかける。

道徳の再建はいま世界の運動になつてゐる。道徳性がぎりぎりの處で守られるだけではなく、もつと擴がり、生活日常を、ほのかに包んでゆく時、社會は見違えるほどよくなる。

法然上人は、生活しながらの念佛ではなく、念佛しながらの生活を説かれた。生活のどこかの部分に信仰をおくのではなく信仰が日常生活を包んでいるとき、どんな生活も光をもち、素顔がそのまま美しい花の香を放つ。日常性のよさ、素顔のよさが互に認められ、靜かに街に流れる世の中を、早く恢復したい。ぎりぎりの所に小さくなつてゐる道徳・信仰をもつと連れ出して、のびのびさせよう。(藤田寛雅)

目次

芙蓉合掌……………吉田絃二郎(6)

法然上人法語……………眞野正順(2)

法然上人と能……………寶田正道(14)

若竹の歌……………中村康隆(8)

詩 秋……………吹田順助(1)

秋日・追憶……………鳥居良禪(18)

N君と煙草と女……………吉田政雄(16)

選擇ということ……………増谷文雄(20)

母の臨終……………阿川貫達(9)

會友の聲・後記

秋

リ
吹 田 順 助 譯
ケ

葉が落ちる、遠くからのやうに落ちる、
空のなかで遙かなる庭園が幾つも枯れたかのやうに。
みんな否むやうな身振りで落ちる。

そして夜々、よるよる重い地球が
あらゆる星と別れて、じやくじやく寂寞のなかへ落ちる。

われらはみんな落ちる、この手が落ちる、
お前のもう一つの手も

——あらゆる手が落ちるのだ。

しかしある一人がある

——これらの落下を限りなくやさしく両手でうけとめる……

法然上人法語

眞野正順

生けらば念佛の功つもり、死なば淨土に参りなん。
とても、かくても此身には、思ひ煩らふ事ぞなき
と思ひぬれば 死生共にわづらいなし。

啄木の歌に

「かにかくに 澁民村は戀しかり。

おもいで山 おもいで川。」

と、いふのがありますが、考へて見ますと、人間は、いろ／＼な思ひ出を入れた壺のやうなものです。

遠い幼い昔から、この現在の自分にいたるまでさまざまの事件や経験が、積み重ねられています。「あの頃は」と、今でも慕かしく思ひ出される楽しい記憶もあれば、また、思ひ出せば、今でも慄然として膚が寒くなるやうな危い事もありました。そう云ふさまざまの或は嘆き、或は喜びした事も、今はもう、すっかり遠い彼方におし隔てられて、すべてはたゞ一思ひ出の珠一となつて、私の中に残つておる。もう其時の恨みもなければ、悲しみもない。時間といふものは、一様に總てのものを淨化して、嘆きも悲しみも

みんな慕しく感ぜられる一昔の夢一であります。それは丁度、昔し、烈しく燃えた生命の火が、今は冷たいわすかの灰となつて、私の中にたまつてゐるやうであります。

一度、過ぎた私は、もはや再び歸つてくる事はない。かうしている間にも、私の生命は燃えて、刻々に新らたなる過去となつて行きます。それは丁度、一本の線香のふり落す白い灰の一片々々が、下の香爐に落ち、次第にその上／＼と積み重ねられてゆくやうなものです。現在は刻々に過去となり、過去は刻々に、また新らしい過去に蔽はれて思ひ出はいつしか朧げになつて行きます。

然し、かうして、現在は刻々に新たな灰となり、その上に、また新しい生命の火は燃えてゆく間にも、私共はたとへばあの香爐の清らかな火のやうに、燃え切つた灰は、さ／＼と崩れ落ち、新しい火は濁りなく澄んで燃えてゐる

でしやうか。

そうでなくて、たとへば、まだよく燃え切らぬものが灰の中にあつて、何時までも、ぶす／＼と燻つてゐるやうに過去の「行きが／＼」が、消えるでなし、燃え切るでなし、何時までも、口惜しい意地や、思い切れぬ執着となつて、生活の上に影をさしている、といふ事はないでしやうか。

實を云へば、私共の日は多くそうなのであります。大抵は、今迄の行懸りに引ずられて、人に對し、仕事に對し、その日／＼を迎へてゐるだけであつて、本當に、今日一日の生命を、純に、新しく、爽かに生き切る事に、稀であります。

よく、勝手になぞ出て見ますと、そこらに掃寄せられた塵の山から、ぶす／＼と煙をあげてゐるのを見ます。燃えるでなし、消えるでなし、何時までも燻ぶつて、不愉快な臭を四邊にたゞよはせてゐる。丁度その様に、私共の生活の中にも、燃え切らぬ過去の餘燼が残つて、新しい生命を蔽ひ、いやな臭ひを發散して、四邊の者まで不愉快な思ひをさせてゐるのです。

現在に、善く燃えるためには、過去はすつぱりと灰となつて居なければなりません。そうでなければ、現在の生命はよく燃えません。昨日を昨日とし、すつぱりと切り捨てて、この今日に新しく飛び込む。それが眞によく生きる道であります。古人は「一日日に新なり」と云ひました。日々

に新たなる生命を得る爲には、ふつつりと餘燼を止めず燃え切り、全く新たなる自己となりて、この今日に飛込み、勢一杯に生き切らねばなりません。

過ぎこし過去を振返つて見ますと、幾年月、あちらこちらを引廻されて來た。自分の變化の跡が目に見えます。その歩んで來た跡は、必ずしも、自分から望んだやうなものでは無かつた。偶々なした事が計らず實を結び、その實からまた新たな芽を出して、思はぬ所に來てしまつてゐる事もあります。人の過ぎて來た過去は、たとへば、枯野につけた火が、燃えて大地に黒々と不規則な燒跡を残し、それがこの先き、何處にどう擴がり、また何處へ行つて消えるか、今から定める事が出來ないのに似てゐます。

この過去の生命の火が燃え残して行つた灰の跡。それを捕へて、私共はやゝもすれば、自分だと思つております。私共が「自分」といふものを考へる時には、いつも自分のした跡を考へる。計らず成功した事があれば、それは實は「まぐれ當り」に近いものであつても、何とはなしに、誇らしい自信を禁じ得ない。それとは反對に、ほんの僅かな躓きが原因となつて失敗したのであつても、それから後は何とはなしに自信に曇りが出來て、いつも氣怏れがする。「自分といふものを定めるのは、いつも、自分の過去であります。自分の踏み残した足跡によつて、自分といふものを決めておる。」

それ故、人は、その境遇や運命が思はぬ影響をする事が實に多い。よい境遇によつてよく伸びる自分を見て來た者は、自信を強めて伸々と成長する。悪い境遇によつていつも不運に見舞はれる者は、いつか卑屈な陰影の下に萎縮してしまふ。人はいつも過去によつて擱まれている。一般の人々にとつては、その過去こそ、その人の自信の全部といふ事ができましよう。

然しながら、私共の生命は、決してその過去によつて定める事はできません。螢火のやうに消え細つた火種であつても、よく風を得れば、山のやうな建物を焼きます。また空を焦すやうな赫々たる火も、水に遭へば忽ち消え細ります。自己の内容は、過去の姿によつて定める事は出来ません。過去の跡によつて自分を定めることは、譬へば、我と自ら我身を縛つてゐる様なものです。

まことによく生きるためには、過去を過去として、すつぱりと振り落さねばなりません。

過去をすつぱりと振り落すためには、むしろ、こゝにある自分を死なせる事が肝要であります。こゝに自分と思つてゐる自分は、實は、過去の灰骸にすぎないからであります。

至道無難禪師の有名な歌に

生きながら、死人となりて、なり果てゝ

思ひのまゝに　する術ぞよき

とあるのは、この意味であります。

然し、このやうに、すつぱりと死に切つて刻々新らしく生れかわるといふ事は、果してそう言ふやうに出来得る事でありまじやうか。實を云へば、それは非常に困難な事です。なぜならば、私共の日々は、この自己の形をとらへ、それを頼りとし張合ひとして生きてゐるからです。それを、スツパリと奇麗に死に切るといふ事は、一時なら兎も角、生涯を通して之を行ふ事は、なか／＼出来るものではない。おそらく非常な達人でなければ不可能な事です。

それならば、常人我々には、この事は全く望無き事でありまじやうが、決してそうではない。こゝに、初めて、信仰ある者の意味が出てくるのであります。

信仰ある者は、安んじてこの現在の刹那に死に得ます。なぜならば、大いなるより處をもつてゐるからです。大いなる永遠の安らひの場所を、心の中にしつかりと持つておればこそ、躊躇ふことなく、この現在刻々の刹那に、潔く死に切り生きぬく事が出来るのであります。

何事も、眞の心のすわりが一方になくしては、爲し得るものではない。眞にこゝに生き切るためには、翻つてこの現實を超えて、永遠なる眞實なるものゝ中に、安心の所を持たねばなりません。即ち、私共の眞の本質であつて、然も、より高く大いなる生命たる佛陀に歸らねばなりません。

ん。かくて、身はこゝに在りながら、心は既に永遠なる國に安じて動かぬ事によつて、はじめて深く、こゝに死に切り生きぬく事ができるのであります。

それ故、念佛者の生活は、二つの面を持つと云ふ事ができまじやう。一方から云へば、この一生は、この小さな私を超えて大いなる眞實を求め、御佛の永遠なる懷に歸りゆく旅であります。他方から云へば、かくる動かざる信念を以て、決然としてこの激しい現實生活にふり向き、その一刻々々に生き切り死にきり、滾々として泉の如く、常に新たなる生活によつて、佛の精神を現してゆくのであります。即ち、一方は、永遠に向いゆく念佛の生活。他方はこの現實の淋しい一刻々々に生き死にする奮闘生活。この二つの面が互に支えあい、貫きあいこゝに眞實の信仰生活を形づくるのであります。

一生けらば 念佛の功つもり 死なば 淨土に参りなん
一方において私共の一生は、あく迄永遠なるものに向いゆく生活であります。このかりそめの世にとゞまらず、大いなる眞實の佛を求め、佛を念じ、その光の中に生きつゝやがて、永遠なる懷ろの中へと歸つてゆく。こゝに、再び惑ふことのない、安らいの世界が現はれるのであります。

一とでもかくても この身には 思ひ煩ふことぞ無き
大いなる眞實に歸し終つて、この身に、何の不安もなくまた動揺もない。大いなる安心定まつて、死ぬるも、生くる

も、なんら惑ふこと無く、躊躇ふ事なきに至つて、人は、初めて、決然として深く、この一生に生きぬき死に去る事が出来るのであります。

一と思ひぬれば死生ともに垣なし
死生ともに煩ひなきに至つて、過去は刻々に清く洗ひ去られ、新たなる生命は、澄み透つて現はれてくる。その泉のやうな生活が、常に念佛の聲に裏づけられて、常に充實し、常に若やいで止む事がない。それが眞實の生活の道であり。また、念佛信仰者の道なのであります。

唐詩 汲想

秋日

秋 津

巷にあかく日は沈み
語るすべなきわが憂
ゆくひとまれにこの道は
たゞ秋風のふきすぐる

照鏡見白髮

張九齡

鏡にうつすわが影に
わかき想ひは歸らずて
一筋しろき霜の色
秋を知る身となるあはれ

― 秋日の憂心を唐詩に汲み
たわむれの譯稿をなす

寺 尾 讓



芙蓉合掌

吉田 絃二郎

昨夜の強い雨風で庭の百日紅の花が一夜にして散つてしまつた。百日紅はその名が示してゐるやうに、夏のところから咲いて秋までも淡々可憐の姿を枝頭に見せてくれるもので、花の季節としてはずるぶん長いものである。

今年も庭の隅に朝夕に百日紅を見ては、その花の壽命の長いことを信じてゐた。それが昨夜の雨風にあたふたと散つてしまつた。

春の花には誰れも花に嵐といふ諸行無常の觀念を附け加へて考へることをするが、百日紅のやうな花に對しては、やゝもすればわたくしたちは嵐のあることを忘れてゐる。

人間は誰れも死ななければならぬ。生死は春の花ばかりの運命ではない。秋の百日紅にも同じ運命はある。散り布く百日紅をながめて今朝はつくづく萬有流轉の感を深くした。

永い年月の習慣から、ほとんど無意識的にわたくしたち

は少年のころ、年賀の手紙の冒頭に「國やすらかに」とか「四海波靜かに」といふやうな言葉を書いたものであつた。

今日あの恐ろしい太平洋戦争の戦火にさらされ、敗戦後の不安を経験しつゝある現在のわたくしたちは一國やすらかに「四海波靜かに」といふことが、どんなにありがたいことであるかをしみじみと感じてゐる。

またわたくしたちは日常の文通に「御機嫌よくわたらせられ何よりのことに存じます」などと、これもほとんど無意識的に書いてゐる。自分や自分の家族たちがみな揃つて健康である時はほとんど形式的に書いてゐる。

しかし一度、自分の周圍に病といふものがあらはれて來ると、はじめて「御機嫌よく」健康であることがいかにありがたいことであるかを知る。

このころわたくしも、身邊近く病人ができ、晝夜とともに病人のことばかり考へてゐるので一しほ健康な家庭の人たちがうらやましい。昨日わたくしの家の病人が近所の家

の笑ひ聲を聴き「丈夫な人たちはいゝな」と言つたことばが、いつになく腸にしみるやうであつた。

病院のベッドに寝てゐると窓の外を歌をうたいながら通り過ぎて行く人がある。あの人たちは窓の内に病に悩んでゐる人があり、生死の境に夜も眠れないでゐる人があるといふことを想像もしてゐい。

しかしこの世間には、さういつた病苦に悩んでゐる人、さういつた病人を抱へて、日夜を悶えてゐる人がずゑぶんだいことであらう。それなのに、わたくしたちは時として病院の窓の外を唄をうたつて通り過ぎるやうな過失をくりかへしてゐる。

何も罪を犯してゐないと信じてゐる時ほど、わたくしたちは深く罪を犯してゐる。

つい先達てのことである。

善光寺大勸進の清水谷恭順師がお見えになり、こんなお話を承つた。

一戦死者の遺骨を迎へてかへりゆく行列がありました。道行く日本人の誰れ一人として帽子を取るでもなく、頭を下げるでもなしといふ有様でした。するとそこに二人の進駐軍が通りかゝつて來ました。かれ等は遺骨を見るや、す

ぐに立ちどまつて丁重に舉手の禮をして立ち去りました。このお話を聴いてゐたわたくしまでが恥づかしくて顔が緒らむやうな氣がした。宗教を忘れた民族、三寶を敬することをおぼれた民族の姿である。

かつて戦時中文部省の屑々たる吏僚が各宗派の管長を集めて訓示をしたことがあつた。まことに末世的な現象である。

人を抱えるのは家庭である。家庭のしつけである。家庭のしつけの根本は神をおそれ佛を敬ふことである。神佛をおそれ敬ふといつても、それが心の底から浸み徹つてゐるのでなければ駄目である。進駐軍の兵士が日本人の遺骨に敬禮をしたのは、生まれ落ちるからのキリスト教的なしつけである。

わたくしは參州生まれの青年を知つてゐた。參州は佛教のしつけのきびしいところである。

その青年は未だかつて殺生をしたことがなかつた。大學を出てしばらく伊豆の温泉地に滞在中のさる富豪の中學生の家庭教師として雇はれてゐた。ところでその中學生は病弱なので醫師のすゝめによつて、毎日谷川で釣をする。青年教師も毎日そのお伴をしなければならぬ。わたくしはかれが溪流に綸を垂れてゐたところを見たが、かれは釣り

上げるたんびにきはめて、おごそかに南無阿彌陀佛を唱へるのである。その態度には少しもわざとらしいところがない。幼年時代から、叩き込まれた佛教的しつけである。

最初は一先生が念佛を唱へるので、少しも釣が面白くない一と不平をこぼしてゐた中學生も後には念佛を唱へるやうになり釣を止めてしまつた。それでも溪川には二人で毎日出かけて行つた。

綸を垂れてゐる間は綸に執着がある。観ずる世界が限られてゐる。綸を捨てた刹那少年は溪川を通して、大自然の裡に、もつと本質的なものを感じはじめたのであらう。

いたましくも、昨夜の嵐に散つた百日紅を惜しみながらわたくしは雨あがりの武藏野を歩いてゐた。

わたくしはあたりの農家の庭を注意して見て行つた。何處の家の百日紅も昨夜の嵐に、影も見せず散つてしまつてゐた。

わたくしは花なき秋の落漠を數じながら夕暮れの路をかねて來た。その夜は月が美しかつた。

然るに今朝、わたくしが雨戸を明けた時、わたくしは一輪の芙蓉が楚々として咲いてゐるのを見た。わたくしは默然として合掌した。

若竹の歌

中村康隆

朝だ、夜明だ、小鳥が鳴くよ。

そよ風さやぐ窓の外、

竹の葉蔭に、群れ來て飛んで、

露の光も、キラキラと。

伸びよ、若竹、スクスク伸びよ、

若い日本の曉について。

晝だ、日中だ、みんなで踊ろ。

日射しゆたかな庭の内、

竹の根かたに、輪に輪を組んで、

花の生命も、ハレバレと。

伸びよ、若竹、スクスク伸びよ、

若い日本の光を浴びて。

夜だ、日暮だ、みんなで唱お。

夕焼小焼の縁の端、

竹の影繪に、手に手を取つて、

夢の翹も、カルガルと。

伸びよ、若竹、スクスク伸びよ

若い日本の希望を負つて。

—新しい日本の子の生長を祈つて、その子供會の爲に—



母の臨終

阿川貫達

私は寺の先代金池承順上人の室（金池する子）を母として事へ、

寺内一同平和安穩の中に如來様に事へて居た。母は平生日課念佛を稱へ佛様への御供養を怠らずつとめて居られた。此の母が本年二月

初めより氣管支肺炎で病臥した。よい老先生の診療を受け熱も下り

病勢衰へたので先生は起き出で、日光浴をするやうすゝめられ彼岸

頃には暖くなると共に回春するとはげまされたが、遂に起き上るこ

ともなく僅に不淨を催す時だけ起きるのみであつた。何となく身體

が大儀であつたのであらう。私も庫裡に硝子戸も出来一日中日當り

よく暖かなれば縁側に出で布團によりかゝつてあたゝまることがよ

いと思うと、すゝめたが一度もそうされなかつた。元來蒲柳の質で

且つ偏食の母はだん／＼食物もとれなくなり、遂に老衰と云うやう

な事で本年三月廿四日夜命終された。ペニシリン、リンゲル、ブド

ウトウ、神経痛の注射等澤山の注射をしたが某醫師がリンゲルの注

射を二本續けて打つてから手足の節々が痛くなりはたの見る目も堪

へ難き程に痛みで惱まれた。痛床で眼がさめると痛い／＼と申すの

で私は病人にお念佛を唱へなさい痛みが靜まると云ひ、自分も寺内

の人も看護婦さん（麻布霞町一番地宮崎しげ子六十歳）も代る／＼

念佛を唱へながらさすつてあげた。夜も一時間毎に眼がさめて痛い

と云はれるので、一同安眠せず代り合つて念佛の中にさすり、靜ま

るとさつと休むと云うやうな状態が續いた。そして母はひたすら阿

彌陀様の御迎へを待望して居られた。かくて遂に三月廿四日になつ

た。

此の兩三日來病狀がよくないのであつた。廿四日朝私は母にもう

阿彌陀様が御迎へにきて下さるからよくお念佛を申しなさいと云う

とよく納得された。此の時分には思うやうに言語を發せられず、簡

單な言葉家人の名を呼ぶとか痛い／＼と云うやうな言葉を云はれる

にすぎなかつた。痛い／＼と云うとき「あゝあゝ」と云う聲がきか

れたのは南無阿彌陀佛と唱へられたのであつた。私は此の日特に念

佛をすゝめたのである。珠数は十五日頃より手を放さず持たれた。その夜九時前に主治醫が來られた。老練なよい先生である。病人は廻らぬ口でよく診て下さいと頼まれた。私もよく診ていたゞきたいと申した。先生はいと熱心鄭重に診られた。診察後私は先生に淨土宗では出来るならば臨終におつとめをして、阿彌陀様の御來迎をいたゞき往生するのですが、此の臨終行儀をしてよいかと尋ねたら結構な事であると云はれた。此の間を發したのは母は信仰的には疾く阿彌陀の御來迎を待つて居られるのであるが、又見方によつては尙早に病人に死を告げることになり、氣の毒だと云うやうな感じを周圍の人が持たないやうにとの心やりからであつた。そして先生に遠方の親戚に重態を知らせたいと思うがと云うと、明朝來診の結果お知らせして十分だとの事であつた。少くとも尙二三日は壽命が續くと思はれたのであらう。先生が歸られると私は母の意識が現在明瞭な間に有難い發願文をおきかせし共にお念佛を申さなければと思ひ先づ假本堂の本尊前に詣で、どうか母をして臨終正念に往生さしていたゞきたいと懸命に御願いした。私としては母も同様阿彌陀様にお事へする身でありながら、痛いと苦しみの中に命終されたのはまことに申譯ない氣持で一杯であつた。人は皆自らの業によつてかくあるべきものとは思ふものゝなんとかして安らかに終りを全うさして頂きたいと祈念して止まなかつた。本堂から下り疎開して無

事であつた來迎圖を取り出し病人の枕邊にかけ香燭を献じた後、私は母の耳元に口をよせ、お母さん只今阿彌陀様が御迎へに來て下さいますからお念佛を申しなさい、私も一緒にとなへるからと申すと二度程うなづき納得された。そこで身體の向きをかへて來迎圖の拜めるやうにした。それまでは痛いと苦しんで居られたが身體をむきかへて來迎圖に向うと痛みは止み靜かになつた。そこで私は徐々に三奉請（阿彌陀如來觀音勢至の二菩薩を此所に請迎し奉る文）を唱へ發願文（善導大師の往生禮讚にある文章で、願くは佛弟子たる吾々は、命終の時には心亂れず身にも心にも諸の苦痛なく禪定に入るが如く快樂にして、彌陀如來觀音勢至等諸菩薩の來迎をいたゞき極樂の上品上生に往生せしめ給へ等の文）を稱へ、照益文（阿彌陀如來の光明は遍く十方の世界を照してなべての人を救済するが、特に念佛を唱へる人には別して心を添へて救済愛護の思念を深く垂れて捨て給はずとの意味の文）を讀み、次で中音で靜かに念佛した。十五分位で母の様子がおかしいので台所に居た人々も全部呼びよせ一同で心靜に念佛を唱へた。するとだん／＼呼吸が早くなるのが、頭の動き方で後方に拜んで居る私にもわかるので、脈を見て居た看護婦に臨終ではないかと尋ねると未だですと云う、しかし呼吸はやがて止つた。命終したのである。まことにいと靜に終られた。ありがたい事であつた。時に九時四十五分。そこで私は親戚の人々に申し

た。阿彌陀様は私達の目に見奉ることは出来ないが、まさにこゝにましまして母を御迎へ下された事が感ぜられたでせう。どうかみんな如來様のましますことを信じて念佛されたいと申した。一同は莊嚴なありがたい此の場の雰圍氣で阿彌陀様の來迎を感得したのである。親戚の中には慶應大學生も居り平生宗教に無關心で寧ろ否定的な考への者も居たが此時の情景に心打たれて私の言つた事をよく理解してくれた。私は母の死を通じてこゝにも阿彌陀様のいと尊いお救ひを味はせていたゞいた。

母の顔を見守つて居た母の唯一人の妹と母の孫君とは交々言う、母は目を見聞いてじつと來迎圖を拜し、目に涙をたゞへ（歡喜の涙であらう）少し口を動かして居られたそうである。恐く念佛を唱へて居られたのであらう。看護婦さんは脈を見て居たがその時母の手は合掌して居たと云う、二三日來左の手が自由でなかつたのであるがそれでもよく合掌されたと思う。そんな次第で看護婦さんは驚いて云はれた。ありがたい事でした。今迄お苦しみになつたのにそれが止み安らかに引取りになりました。私は今迄永い間に數多くの臨終の御世話を致しました。人によると二日も三日も息が引とれず苦しんで終る人もあり、死にたくないとし申しゆく人もあります。それを思へばなんと尊い事でせうと申された。それから取敢ず先生にお知らせした。先生は三十分前に診察した患者の死を聞き驚かれ

たそうである。そして翌朝來寺靈前にぬかづいて居られた。その時看護婦さんが昨夜臨終の模様を巨細御話した所、先生も信仰の力はえらいものだと思ひ居られた。

母の死顔は今の今迄痛い／＼と苦しまれたので、どんなにかこわい顔をして居られるかと恐る／＼見れば、その容貌笑めるが如く柔和で實に有難い事であつた。私もほつと安堵した。まことにありがたいづくめで尊い事であつた。親戚の人々も別れの哀しさの中にもいとも安らに、一同が念佛唱和の裡に終幕が下されたので皆安心して生前の事など語り合つて一夜を明し通夜を営んだ。

私は晨朝勤行の時念佛中に本尊前によく御禮を申し上げた。御蔭様で母を臨終正念に引接して下され洵に有難う御座居ました。ほんとに希有な事でしたと、ありがた涙に咽びながら心ゆくまで大聲に念佛申し上げた。眞に感悦極りない忝い事であつた。

此の時の事を葬式後心落着いた時思ひ出して臨終行儀を早くしてよかつた。先生の言はれた明朝の診察をまつて居たのでは既に遅い事は明であり、又臨終の様子をそれと知つてから急いで來迎圖を取出したのでも遅い。人々の心は顛倒して靜に念佛を一同で唱へると云うのは難い。ありがたい事には偶然ではあつたかも知れないが、まことに順序よく靜に事が運ばれて、去りゆく人も安祥として貴い御法を聞き、歡喜念佛の中に來迎を蒙り心ゆたかに佛後に従つて往

かれたであらう。此の恰好の時期を捕へ得たのは恰も源平の争亂の屋島の合戦に、那須與市宗高が大將義經より遙か沖合の軍船に擧げられた扇を射よと命ぜられたが、風吹き波立ち軍船ゆれて扇の的定らず躊躇した時、心中に入幡大菩薩初め遠く故郷の那須温泉大明神に祈願をこめ、目を見開けば幸にも風は静まつたので日の扇のまとを美事射たにも似た事であつたと、獨り會心の喜びを禁じ得なかつたのである。

阿彌陀經には念佛を稱へた者は阿彌陀佛が諸の聖衆と共に現に其の前に在す。是の人終る時心顛倒せず、即阿彌陀佛の極樂國土に往生を得とあり、彌陀の來迎をいたゞいて行者心顛倒せずして往生するのである。今まで病魔に悩んだ人が臨終に、從容として禪定に入るが如く命終出来るのは、即阿彌陀佛の來迎あるによつてしかあるのである。母の場合は阿彌陀經に説かれた通りでこゝに經典の眞實性を體驗したのである。そうして此の往生の悦びを發表してゆく人もあるが、多くはその喜びを發表する術がなく、既に口が不自由で言語で自由發表が出来ぬ、手足が不自由故ゼスチュアでも表現出来ない。唯自分のみ心に喜悅を感じて獨りいそゝと行くのであらう。法然上人は來迎は行者のみが見奉るので第三者には見奉ることは出来ないと云はれてあるその通りであらう。

上記は往生人の範例と思うが、然し人は死の縁無量で軍陣で死するもの、大路にてはかに死するもの、厠で死するもの、大刀にき

られて死するもの等あるが、何れも平常稱ふる念佛によつて、必ず來迎があると祖師上人も云はれた。臨終に念佛を唱へなければ往生出来ないと云うのではない。平生の三心具足の念佛即ありがたいと思ふ心、助け給へと思う心で稱へた念佛によつて往生が出来るのである。

科學萬能を云う人には來迎は錯覺とか幻覺とか云うかも知れないが、老練な醫師でも三十分後に命終すべき人の壽命を知ることが出来ないものである。高度の科學に立脚する人々にして尙且然りである。是が世の中の常である。二二の四三三が九と云うやうに數理科學で萬事解決するものではない。とは云へ數理科學を無視するものではない、尊ぶべきであるが、尙是等の及ばざる世界のあることを知る必要ありと思うのである。

因に法名清月院智譽妙好淨華大姉 行年六十六歳。

御斷り。自分の身近の出來事で憚り多い次第で恐入りますが、極最近の事で、又確實な事でありますので、是を誇張なく正直に綴りました。

近來にみる佛教放送のヒット、眞野先生の自らなる信仰の玉滴、淨土教義の神髓を切實に語る

法然上人法語

讀者の要望にこたえ、今月號より掲載致します。

無人電車が突然に走り出し、坦々たる大野を轟進する列車が轟然として脱線する。主人を送り出して朝飼のあと仕末をしていると、人氣ない裏山で雷電の響きとともに火薬が爆発する。全く以つて物そうな世の中である。

元來、人間が生きていられるのは、自分を信じ、人を信じ、その他宇宙萬物を信じているからである。相手を信せねば商賣は出来ぬ、運轉手を信頼せねば電車には乗れぬ。いや、自分の生命を信じているからこそ、安然として一日のやすらいの床にねむることが出来るのだ。ところが、この頃のように、今まで全く信じ切つていたことが、一つ一つ、くつがえされたのでは、一日一刻として晏如としてはいられない。世の中が騒がしくなるのは當り前である。

佛教は難信之法だといわれる。然し信なくばよく佛法の海に入ることとは出来ぬとも説かれる。この頃の世情では、仲々に信ずる心は生まれてはこぬ。だがそれは人間の世界のことだから、人と人とのことだからである。鐵火もこれを溶かし得ず、洪水もこれを押し流がし得ぬような——佛——の世界は、これとは全く異ふ。

われわれが信ずるといふのは、自分が信ず

ることである。電車は必らず線路の上を走るものだと思ふのは、人間が、はかなくせまい己れの量見からそう信じているだけのことだ、もつと廣く、高い世界からみれば、そうとは限らない。佛の世界に入つて、念佛の心でみるならば、一日を終えて枕につく人の姿は、まさに死の巨口の前に首をさしのべるに等しくみられる。われわれは平氣でいるのだが、佛の眼からみると、危くて、はかなく、ハラハラしてみてもはいられないのである。

信ずる心

白金隆司

われわれには、目前の浮世の裏にある、本當の世界のことが分らないから、一寸一寸と死の手に引寄せられていることも知らず、華嚴經の三界火宅の譬えのとおり、嬉々として五官の享樂に耽つてゐる。それがたまたま、眼前の平和が破られると、上を下への大騒動をする。佛はきつと、高い世界から、われわれが立ち騒ぐ姿をじつと御覽になつてゐることだろう。そして、芥川の「蜘蛛の糸」ではないが、折角投げて助けてやろうと思つた糸も

フツツリと断ち切られてしまふであらう。

自分が信ずる、人間が人間を信ずる。ここに大きな間違がある。信ずるといふことは疑われないことであるとともに、自分をなくすることではなければならぬ。自分も立て他人も立てるといつたことは、宗教の世界では適用しない。信ずるといつたら、文句なしに信じなければならぬ。いや、信ずるとか信ぜぬとかをいうのではなくて、いやおうなしに信じてしまふ。信ぜずにはいられぬ。これが本當の信仰である。アブラハムがわが子イサラを神の命によつて犠牲にささげる心、これには是非善惡を超越して、ただ神の言葉を信ずる心以外には何もない。西行法師の「なにごとのおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」の心境。人間をではなく、人間がではなく、佛を、佛が、信ぜしめるところに、念佛の功德が湧き、磐石の如き信心が確立する。佛の世界には偽りもなく、裏切りもない。いゝやんや無人電車などの人家に突入することもなく、萬々不易、千古不動、山崩れかかろうと、海浪襲い來ろうと、微動だにせぬ信仰の礎石がそこにあるのである。人を信ずることは易い。だが佛を信ずるはかたい。信ずる心は念佛にこそ生まれる。

能 上 人 然 法

道 正 田 寶

せられてゐた。主役は、本座田樂菊阿の子で當年とつて十七歳の福若丸といふ美少年である。彼の能藝、容儀が尋常でなく、至極神妙であつたことは、親王はじめ觀能の月卿雲客以下僧俗祇候の衆に至るまで、賞翫の引出物として盃、折紙、馬、太刀、或ひは袈裟衣などを惜しみなく與へた事實からも大方察せられるが、また「春日永しと雖も、夕陽西にかたぶく間、日没を其期として、貴賤群集の人能毎に感聲を盡し、萬歳の美談只耳目を驚かす」云々と記録せられてゐる點からも想像できるであらう。(文安田樂能記)

さて、當日この福若丸の主演した能藝番組の中で、第七番目に「法然上人の能」といふ一番がある。これは一體どういふ内容のものであつたらうか、記録にはそこまで立入つた説明がないので、今のわれわれにはさつぱりわからない。

しかし、題名から推測すると、少くとも法然を主材とした能であつたことだけは、間違ひない。そこで、當時、法然を主材とした能に、どんな種類のものがあつたか、それを調べてみると、或る程度の見當はつかぬこともなささうである。

一
今から約五百年前の話である。文安三年三月十七日、京都住心院の能舞台では、後花園天皇の御弟伏見殿貞常親王の台覽の許に、「熱田の春破門の能」「女沙汰の能」「北野物狂ひの能」など、十番に及ぶ田樂能が華やかに演

二

いふまでもなく、現在の能樂は、その基本となつてゐる大和猿樂が本來の猿樂能藝の手に、新座本座の田樂能はじめ、多方面の型を取入れて新能としたものである。従つて、すでに廢曲となつたもの、又は現行曲の謠文の中から、例へば法然を主材としたものを選び出してみれば、その中に古い田樂能の面影を多少なりと残してゐる傾向は争はれない。ところで、現行曲又は廢曲の中で、法然を主材としたものは、凡そ十數番ある。「生田敦盛」「上人流」「甘糟」「櫻の池」「誕生寺」「一枚起請」「兼實」「黒谷」「選擇集」「重蓮」「熊谷寺」「足引」などがそれである。しかし、現行曲として唯一の「生田敦盛」は法然の従者をワキとするだけで、直接法然を主材とするものとは、いひ兼ねるかも知れない。むしろこれは矢張り敦盛を主としてゐる。さういへば、「甘糟」以下の諸曲も、亦多く法然を取巻く人物か、又はその關係者を中心としたもので、嚴密には法然を主材とした能とはいひ難い。僅かに「上人流」「選擇集」が、法然をツレ或はシテとしてゐる點で、「法然上人の能」といひ得る可能性をもつやうである。しかし、題名や内容の劇的興味から考へれば、法然をシテとする「選擇集」よりも

ツレに配してシテの遊女を教化させる「上人流」の方が、遙かに觀衆の喝采を博するに足る要素を持合してゐるやうである。すると、どうやら「法然上人の能」は「上人流」か若しくはその原型的な田樂能であつたかも知れないことになる。それで、「上人流」に就て氣のついた點を二三記してみる。

三

「上人流」は、また「源空流」、「神崎」とも呼ばれ、作者不詳であるが、淨土宗の開祖法然(源空)が、山門の訴訟により土佐配流の途すがら、遊女を教化する筋を主題とした三番目物で、夙く廢曲となり、今「校註諸曲叢書」

卷二に收められてゐる。同書の校註に據れば

出典として「黒谷上人傳」、「拾遺古德傳」、「本朝高僧傳」等を擧げてあるが、むしろこれは「正源明義鈔」と改めらるべきである。法然の別傳數多き内、「正源明義鈔」は、從來、その内容上より徳川初期の作として餘り重要視されてゐない憾みがあつたが、その本文を、「上人流」と對照讀み比べれば、明らかに原據としての價值を發揮するのである。その詳細は、近く出る「國語と國文學」誌所收の拙稿に譲るが、今、假りに「上人流」が「法然上人の能」として文安三年に演ぜられたもの

とすれば、その原據たる「正源明義鈔の成立」は少くともそれ以前、即ち、室町初期まで遡ることとなる。

しかし、それはさておき、「上人流」は、内容上、「法然上人の能」として上演される價值も多く、觀衆の「感聲を盡し」、その「耳目を驚かす」可能性も少くない、といへる。今まで廢曲となつた演能諸曲文の中には、幾多本文の傳はらないものもあり、或ひはその内に「法然上人の能」に格好の曲番があるかも知れないが、現在残つてゐるものの中では、「上人流」をそれに擬することが、最も妥當でないか。

四

蓋し、文安の頃は、能學史上、金春氏信(禪竹)と觀世元重(音阿彌)が、世阿彌に代つて妍を競ひ將軍義政の施政下に觀世座再興の努力を爲した時代である。而して禪竹が、當時の代表的知識階級たる東大寺志玉や一條兼良・大徳寺一休などと親交を結び、禪と念佛に深い關心を有したことは、その著「六輪一露」や「淨土教他力自力批判」によつてもよく窺へるのである。

一方、また、淨土宗史の上から觀ても、この時代は、中興の祖了譽聖明や西譽聖聰など

の薰陶を受けた一門の人々が、京洛を中心として宮廷貴紳の間に出入し、盛んに祖傳や祖語を講筵して、大いに宗祖法然意識を高潮せしめたのである。

かかる時代思潮と社會環境の中に、「法然上人の能」が好評裡に上演せられることは、むしろ當然であらう。わたくしは、宗祖法然を思慕する餘り、試みに「上人流」の一曲を以て、五百年前の盛大な能舞台を險の裏に追想してみたが現代のユウウツな宗界情勢に、この一篇が少しでも役立てば倅せである。

彼 岸

一木一草にかぎらず生あるものは、その生を消盡した曉には、死すべき運命を擔つています。しかし梢をみれば凋落してゆく葉の下には、すでに來る春を待つて開く葉や蕾が小さく用意されてしました。

そうです、この世界が、ふたゝびあたたかな、うらゝかな日の光を浴びるのは、雪と霜と氷の冬を越した彼岸でなければならぬ。新しい時代が生れでるにも相當長い苦難を経ねばならない。

N 君と煙草と女

吉 田 政 雄

N 君に俱樂部であつたら、「今日は女に美事に一本やられたよ。しかも無言でね」と言うので、何の事かと思つてきくと、満員の省線の中で、腰かけていて、少々よくないことだが、好きな煙草をパイプで、ブカリブカリやつて、いい氣持になつていたが、ふと前に立つて吊革につかまつていた女の人の顔を見上げると、急にその女の顔がほえんで、しかも何だか、此の世のものではない、一種崇高な顔に見えた。私はハツとして、これは悪いことをしたと思つて、早速パイプをやめて、拭つてポケットに入れた——というのである。これは大分變つたことであると思つて「それぢや、そのいきさつやその時の心境を書いて見て呉れませんか」というと、N 君は快く承諾した。そして數日後、次の手記を私に渡したのである。因に N 君は逗子に住んでいて、今は某會社の社長をしている農學博士である。

N 君の手記

私はいつものように、會社に出勤しようと思つて、逗子から省線に乗った。車中は左程混んでいず、丁度私の前が少し腰掛がすいていたので、「少々御免下さい」というと、膝を送つて一人分あけて呉れたので腰を下した。

私は、いつもは殆ど腰かけられず、東京迄大抵立つた儘來るのだが、(今日は珍しくうまく掛けられたわい)と思つて、何となく和やかな氣分になつた。そしてポケットから愛用のパイプを取り出して煙草をつめて、ブカリー、ブカリーやりだした。無心に、紫煙のゆらゆらと上つてゆくのを見ながら、煙草を吸うのは、いつでも快いものである。

こうしてゆつたりと心ゆくまま、喫煙を楽しんでいると、列車は鎌倉について、例の如くホームにギッシリと待つていた乗客が、忽ち車内になだれ込んで、見るまに車内は、それこそ立錐の餘地もないようになつて了つた。押合つて丁度私の前に立つた人を見ると、こつた柄の、少しはでな着物をきた、中年の女である。顔を見上げると中々美人である。一體この女の職業は何だろう。ただの夫人ではなし、勿論カフェのマダムでもなし、或は女優かなと思ひながら、私は猶もパイプを吸つていた。

一體、以前は車中では誰も煙草を吸わなかつたし、私も固より、禮儀をわきまえて、絶對喫煙しなかつたのであるが、終戦後、社會の各般が混亂動搖して來ると共に、こういう省線もすっかり秩序が

なくなつて、殺人的といわれる混雑を來し、窓からとび込む、中にはガラスを打破つてとび込む、腰掛の上に土足で立つという次第になると、禁煙の規則などは、いと簡単にふみにじられて、あつちでもこつちでも、平氣に煙草をふかすようになった。そこで私も「禁煙」とか「車内で喫煙は御遠慮下さい」という貼札はあつても、何か許されたものとして、いつのまにか、餘り込んでいない時は、車中で煙草をやることになつていた。そして私はずつと前からパイプの愛用者である。——ところで、此の日は鎌倉からどつと混んで來たんだから、いつもなら、早速パイプをやめる筈であるが、此の時は餘りいい氣持で吸つていて、無心になつていて、ただ鎌倉からは混んで、自分の前には中年の麗人が立つてゐるなと思つた丈で、その意識が直ぐに煙草を止めるという反應と結びつかず、猶も煙草を樂しんでいたのである。

ところで、そうやつて、しばらく煙草をくゆらしていたが、ふと自分の前を見上げると、大抵はそんな時は中年の女なというものは、煙をうけて、いやな顔をするものだが、何だか私の顔を見て、にこやかになり、それもまともに私の顔を見るでなく、視線は避けて右に左に見ていたが、美しい顔が俗氣を離れていた。それは何となく氣高い、或は神々しいというに近い感じがした。私ははつとして、今まで煙草を樂しんでいた天上から、急に地上に、或は奈落に墮されたような感じがして、（これは悪いことをした。この女の人は

常の人のように煙草の煩を厭うでなく、そういう事は超越して、こちらを大きく包容するような風である。嫌な顔をされれば、わざと反撥することもあるが、こう出られてはこつちの負である。全くこんな車中で喫煙しては悪い。平生自分で、戦後道義が頽廢したとか違法精神がないとか、憤慨していたながら、自分の場合になるとルーズになつて、本來禁煙である車中で、煙草をふかすなどとは、怪しからん）と強く反省された。——これがほんの一瞬の心の動きである。そこで私はパイプの灰を取り去つて、ハンケチでキチンと拭つて、ポケットにボトリと落した。

この女の人の此の時の顔は、何か印象的で、私はその満員の車に腰を下した儘、無心に丁度眼前の女の腰のあたりの着物を見ながら敢てその顔を改めて見直すでなく、靜に私の眼底に焼きつけられたその氣高い顔を反芻しながら、深い思ひにひたつて東京まで乗つて來たのである。

驛から出て會社へ歩く間、猶も今の女の顔を思い浮べて、（一體誰に似ている顔だろう。何という顔だろう）と考へ續けていた。そして、ふと若い學生の頃、奈良へ修學旅行に行つて見た、ある古寺の觀音の像にピッタリ當てはまると氣がついた。「そうだ、觀音の顔だつた」そう、何か問題の答を得た感じがして、思はず、獨言をして微笑を浮べたら、丁度會社の前まで來ていたのである。

爾來、私は車中では決してどんなにすいていても、煙草を吸わな

くなつた。そればかりではない。映畫館の坐席でも、煙草を禁じられてゐる處は、どこでも吸わなくなつた。人が吸つてゐるのを見ると、(ははあ、やつてゐるな。氣の毒なものだ) と思うようになってた。

そして煙草は好きである。會社の椅子であるとか、乃至は映畫館劇場の喫煙室とか、正當にゆるされた處では、いつも愛用のパイプを取り出して、心おきなく吸う煙草がとても楽しくなつた。

それから不思議なことには、私はもともと大して佛教の知識はなかつたが、それ以來美術店の店頭とか、或は古美術の本の挿繪とかで佛像——殊に觀音の像を見ると先日車中ではほえんで私を見下した女の人の顔を思い出すようになった。そして、あの女だつて、いつも觀音の顔をしている譯でもあるまい。不斷は人間の顔だろう。しかし、心が和かで、高い方へ向いてゐる時は觀音になる。その觀音の顔になつてゐる時がなるべく多いようにと、その人の爲に祈る氣持になつた。

それから毎日、やはりあの線で通勤してゐるがまだあの女には出會はない。今度あつたら、何か言葉をかけたい。そして先日の無禮を謝し、私が心の中に大に得るところのあつたことのお禮を言い度いものだと思つてゐる。

秋 日

鳥居良禪

谷間の蓮池のほとりに銀杏の老木があつて
その梢を透してわずかに秋の空が光つていた
そのころになると
瀧の音も細くなつて
朽ちた經堂のあたりにも撫子が咲き
また蕭蕭と落葉が降つていた

追 憶

その書院の庭は
蒼蒼たる幽谷に向つていた
まばらな栗林の奥に
荒れた五重の塔があつた
いつかその塔の上で禪尼と月琴を奏でていると
對山の松の梢に玲瓏と満月が登つて來た

愚かな誤

素人

印度に長く居た友人の話によれば、孔雀ほど卑しい鳥はないさうである。美しい羽を持つてゐながら、ごみためを漁つて食を求め、それをみると思はず顔を背けたくなるさうである。今日本には孔雀のやうに美しい人は見當らないかほりに、孔雀のやうに卑しい人は澤山居る。

この友人が或晩食事をしてゐると突然孔雀が部屋に入つて来て羽をひろげた。テーブルの食器は飛ぶ、電燈は消える、忽ち大騒ぎになつた。友人は早速印度人のボーイを呼んで蠟燭を買ひにやらせやうとすると「旦那様、どんな蠟燭に致しませう」と言ふので何氣なく「いや、こんなのでいゝよ」と掌で蠟燭の大きさを示した。扱その印度人のボーイはなかなか歸つて來ない、やがて歸つて來たので「どうしたんだ」と尋ねると「長い蠟燭は何處の店にでもありました、旦那の仰言つた

この位の（彼は親指と中指の尖端の隔りで長さを示しながら）長さのものは中々見當りませんでしたので」と言つた。これは目的と手段をとり違へた爲に生じた滑稽話である。目的が達せられゝばよいのである。がそれには必ず何等かの方法手段が必要である。併し方法手段に氣をとられてゐる内に何時の間にか目的が何處かへ行つてしまふ事がある。つまり價值判斷の轉倒である。官僚風に固められた日本の御役所に行くと、屢々かうした誤を御役人さんに犯されて我々は甚だ迷惑する事がある。百喻經の中の次の話はかうした誤りを面白く諷したものと解してよいであらう。扱その話といふのは。

あの人はどうしたのであらう。腰の下にあるのはその男が背負つて來た荷物に相違ない。最前からその上に腰を掛けて、身體を前かがみにしたまゝ、まるで化石したやうに動かない。暑さの烈しい印度の日中には草木も枯れ果てゝ、一人の通行人さへ見えない。

男の傍には棒切れが一本たてかけてある。男はこれを杖にして今朝から此處まで歩いて來たのである。咽喉が乾く、彼はこゝに來る迄一滴の水さへ飲まなかつた。顔は焼けてひ

からびたが、その唇は更に黒くなつてゐる。男は傍にある杖が何だか羨ましいやうな氣がする。あゝ咽喉がかはく。足もとを見ると小さな虫が這つてゐる。それが一寸程の大きさに見える。それが千年二千年も昔のまゝと思はれる砂埃の中をうごめいてゐる。と癢にさはつて來る。眞晝の太陽の下でこの虫が焰になつてもえてしまへばよいと思ふ。

男は突然頭を擧げた豫。期しないのに自分を呼ぶ聲がしたのである。「もしもし如何なさつたのです。あゝさうですか。それはわけありませんよ。この道をも少しおいでなさい。ガンヂス河が流れてゐますからいくらでも水が飲めます。もう一寸の辛棒ですよ。」男は俄かに元氣付いた。やがて彼は思ふ所に着いた名に負ふガンヂス河は千古の水をたゞへて流れてゐる。荷を置き杖を投げ棄てゝ水を飲んだであらうか。否、この男は茫然として其處に立ち竦んでしまつた。愚な男は思つた「如何してこの大量の水を飲み干す事が出來やうか」と。

男は咽喉が乾いてゐた。だから掌に水をすくひ、或は口を水につけて飲めば事足りる。しかし愚な爲にガンヂスの大河を飲み干さなければならぬと思ひ誤つたのである。

「選擇」といふこと

増 谷 文 雄

ここに取りあげた『選擇』といふ言葉は、申すまでもなく、法然上人が、その主著たる『選擇本願念佛集』に冠せられたる言葉であつて、その言葉の存する深い宗教的な含蓄について、すこしく考ふところのことを述べてみたいと思ふのである。

この言葉について、まづ氣づかれるところのことは、佛教のさまざまの術語の中において、『最勝』といふ言葉が、この『選擇』といふ言葉と、相對して存してゐることでないければならない。この二つの言葉は、佛教の中にあつて人々が、その信の依りどころを決定する仕方に関する言葉であつて、そこに自ら、佛教信仰のあり方の、二つの型が示されてゐるといふことが出来る。

佛教の信の依りどころは、もともと『最勝』であつたと言はなくてはならない。釋尊がなくなられてから、さまざまの經典が、佛教徒の心によるべとして、次第に重要な

地位を獲得してきた。佛教的信の中心は、本來、法にあつて、人にあるのではなかつた。人々は、正しき法を知り法を見ることがによつて、釋尊の道をゆくものとなることが出来たのであつた。だが、正しき法を知らんがためには、人々は、何よりも先づ釋尊の教へるところに就いて、これを求めなければならぬ。しかるに、釋尊の入滅のちに於ては、釋尊の教へるところは、いまや經について知るの外にはない。かくて、經典は、滅後の佛徒の依りどころとして、當然、しだいに重き地位をしめるものとなつて來たのである。

人々が經典をもつて究極の依りどころとすることを、佛教の術語では『經證』といふ。『經證』に對してに、さらに『師證』といふ言葉があり、また、『經證』と密接に関連して『理證』といふ言葉がある。佛教的信の本來の立てかたは、明らかに『理證』によるものであつた。正しき理法の存するかいなが、結局の證憑とならねばならなかつた。だが釋尊はすでになく、金口すでに物言ふことなき今日に

おいては、正しき理法の存するか否かは、たゞ經についてこれを叩くの外はないといふことになれば、人々は結局、『經證』におもむくの外なきにいたるのである。そして、その傾向のしだいに加はるところ、そこに、佛教徒の關心はしだいに經典の上に集中し、經典のもつ重さが漸次に加はり來つた所以が存するのであつた。

しかるに、時の經るにつれて、佛教徒の前に存する經典は、しだいにその教を加へてきて、いまや、經、律、論の三藏の、老大なる量が人々の前に積み重ねられた。人々はその中から、いづれかの經典を擇びだして、その依るべきものを決定しなければならぬ。その時、人々の先づ問ふべきことがらは、いづれの經典が最も勝れて釋尊の眞意をつたへ、正法の存するところを指し示してゐるであらうかといふことであつた。老大なる經典の前に立つた人々が、先づ直面したところの課題は、そのやうな意味における『最勝』であつたのである。

その課題に對する人々の答へかたはさまざまであつた。

論によつて最勝の法を求め得たとする者もあつた。經によつて釋尊の眞意を捕捉し得たりとする人々もあつた。或いはまた、律によつて、その課題を答へ得たりとする人々もあり、更に教外に別傳ありと、獨得の解決の道についた人々もあつた。その道の求め方はさまざまであり、その選びとつたところも種々であつた。だが、その結局は、どこま

でも正法の存するところは何處であるか、釋尊の説法の最高の表現はいづれであるか、そのことを求めてゐることに於ては全く異なるところはなかつた。それらの努力はすべて、何が『最勝』であるかを質ねる努力に外ならなかつた。いづれが最も勝れて正法を表現してゐるのであるかとすべての努力は、その一點にそゝがれてゐたのであつた。

二

しかるに、そのやうな『最勝』をもとめる努力の方向につひに大なる轉換が行はれる時が來た。何が最も勝れたる正法の表現であるかと、そのことを索ねる努力が一擲せられて、何が最も知に相應しい道であるかと、そのことを求める努力の方向が、新たにそこに登場して來たのである。その新しく大いなる方向の轉換を、斷乎として敢行せられたものは申すまでもなく、わが法然上人であつた。そしてこの新しい努力の方向は、その主著『選擇本願念佛集』が明白に語つてゐるやうに、それは『最勝』を索めることに對して、相應しさを『選擇』することであつたのである。説のごとく修行すれば、すべてによく生死を過度するこゝとが出来らるであらう。法のごとく修行すれば、ともにみな菩提を證得することが出来るであらう。だが、ふと我が身をふり返つてみると、そこに、智慧のまなこ盲ひたる私を行法の足なへたる私を見出ださなければならぬとすれば

いかがであらうか。いづれの行も及びがたしと、思ひ諦らめねばならぬ私にとつては、『最勝』の法が何にならうと言ふのであるか。その自己省察のまなことが私のうちに開けてくると、もはや、何が最もすぐれた法であり、何がもつとも勝れる行であるかと論らうことは、私にとつては意味なきこととなつて來ない譯には行かないのである。それはもはや、この私には用もなき高嶺の花にひとしいと、思はざるを得ないのである。

その痛はしい自己省察は、さらに、末法澆季の宗教的歴史觀によつて裏づけられた。——一切の衆生はみな佛性を有するといはれる。遠劫より此方、人々はすでに多くの佛にめぐりあつたと言はれる。しかるに、何故なれば、今日にいたるもなほ人々は、生死の苦界の中を輪廻しつづけ、この火宅にひとしい世間を脱れ出ることが出來ないのであらうか。——そのやうな疑問をもつて、法然上人は、かの『選擇本願念佛集』の冒頭をはじめてゐるが、それに對する解答は、かの『大集月藏經』の文によつて、このやうに述べられてゐることがよく知られてゐる。——『わが宗法時の中に於ては、億々の衆生ありて、行を起し、道を修せんとするに、未だ一人も得るものはないであらう。』——ここに、この自己省察を恐ろしいまでに裏づける末法自覺のなげきが聞かれるのである。末法の凡夫といふものは、このやうなものであるぞと、すでに先聖も教へ説かれてゐる。

しかるに、指折り數へてみれば、當今はすでに末法の時に入り、現にここに五濁の惡世があるではないか。そして私といふ人間は、その末法惡世のまん中にすむ凡夫に外ならぬのではないか。

伏して我が身をかへり見れば、智慧のまなこ盲ひ、行法の足なへたる私がそこにあり、仰いで天の時を觀すれば、末法五濁の惡世がすでに到つてゐることが知られる。しかるとすれば、眞如實相も、第一義空も、この時この私にとつては、まつたく相應しからぬものでなければならぬ。或はまた、五戒により十善によつて、その果報を期待するといふことも、私の分ではないとしなければならぬ。ただ、淨土の一門のみが、この際、この機をもつてして、なほ通入すべき路として存してゐるのみである。そのやうに考へることによつて、法然上人は、よく知られる通り、聖道淨土の二門を立てて、しかも聖道門をゑらび捨てて、まさしく淨土門を選び擇つたのであつたが、それはもはや、理によつて法の『最勝』を論ずるものではなくして、明らかに機によつて教の相應するものを『選擇』せんとするものであつたと言はねばならぬ。

三

このやうにして、『最勝』をもとめることを本來の建前とした佛教の中に、新たに大きく『選擇』の道が打ち開かれ

たことは、まことに意味ふかいことに、私には思はれてならない。

古人は、『道は多い、されど、汝の行く道は一つである』と言つたといふ。なるほど、人間のゆくべき道は、いろいろと考へられることが出来よう。享樂の道もあり、禁欲の道もある。理想主義の道もあり、現實主義の道もある。或はまた、科學の道があり、道德の道があり、宗教の道がある。まことに、私どもの前に道は多い。だが、私といふ一箇の人間は、同時に二つの道を行くことは出来ない。道は多い。されど、私の行くべき道はただ一つなのである。かくて、この人生においては、選擇といふことが、つねに重要な役割をもつて現れてくる。

人間は考へる動物であると、ギリシヤの哲人たちは考へた。しかし、完全なる思惟を求むるものは結局、無行動に終るであらうことを、彼等もまた氣づいてゐた。かくて、アリストテレースはその『ニコマコス倫理學』の中で、『選擇』を力説して説いてゐることが思ひ出される。思惟はいつかはその歩みを止めねばならぬ。そこで、意志が代つて前面に出なければならぬ。その時、選擇が行はれて、そこから行動がはじめられるそこに、人間實踐の重要な一つの契機があることを、かの經驗主義な哲人は見落さなかつたのである。

このごろ若い人々が牽かれてゐるデンマークの思想家キ

エルケゴールは、その主著の一つに『あれか——これか』と名づけてゐることが、よく知られてゐる。享樂は人みな喜ぶところのものである。だが、それは不思議なる性質を存する。充たされたと思つたつぎの瞬間から、退痛がそれにしたがつ。退痛とは空虚の別名である。そして、空虚はまた充たされんことを要求する。酔ふては醒め、醒めてはまた酔はんことを欲するのである。かくて、享樂的生活者の運命は終ることなき空轉である。その空轉に氣づき、その空轉を堪えざるものとなつた時、人は、享樂的生活と倫理的生活との間にあつて、あれか——これかを、決然として選びとらねばならぬはめに置かれるのであるといふ。

行動するものは選擇せねばならぬ。向上せんとするものを選択せねばならぬ。この人生においては、私どもは、つねに選びつゞけねばならぬといふのが、この人間生活の眞理であるのであるが、そのことは、私どもが、宗教の門にむかつて、一路踏入せんとする時にも、また同様である。いふ、そこに、最も決然たる選擇の敢行されるにあらずしては、人は決してこの『窄き門』をかいくぐることは出来ないことを、私どもは、銘記せなければならぬのである。『汝ら何時までも二つの物の間にさまよふや。』と、舊約の記者のしるした言葉の意味はふかい。宗教的生活とは、一言にして言はば關心向元の生活でなければならぬ。世間の些末汚穢より眼を轉じて、決然として、大いなるもの、高

きもの、淨らかなるものへと、一向にむきなほつた生活でなければならぬ。哲學者たちは、しばしば、人間は中間的存在であるといふ。その、天と地との間の中間的存在である人間が、地に背いて、びつたりと元の方に向つて行かうとする。闇と光との中間にさまよう存在であるこの人間がきつぱりと光の方に向き切つてしまふ。その時、人は明らかに、宗教的生活への第一歩を踏み出してゐるのであるがその時、彼は、また明らかに、一つの決然たる『選擇』を敢行してゐることが知られるのである。

釋尊の出家を、歐米の佛教學者が『偉大なる放棄』と譯してゐることが思ひ出される。そこでは、世間的幸福の生活は芥のごとく放棄せられて、自ら『活命の下端』と呼んだ乞食沙門の生活の中に、光に向した道が選り取られてゐる。偉大なる放棄は明らかに、また偉大なる選擇であつた。だが、開昭發智の道を主張する釋尊の道においては、理智をとどめて、意志が物言ふ『選擇』は、必ずしも重要な契機として、表面に持ち出されてゐなかつた。その契機としての『選擇』を、佛教の中において、明確に前景にひき出して來たものは、申すまでもなく、わが法然上人であつた。『最勝』の道をかへて、『選擇』の道を主張せられた法然上人、——さうした面からも、この上人の仕事が、いかに味ひ深く、いかに偉大なるものであつたかを、私どもは、しみじみと思はせられるものである。

誠信は五悲を離れしか。

那那先比丘經卷上に曰く、

「譬えば越王のひきいる車馬や征者共が河を渡つてその水を濁らした。王は最後に河を渡りつつ渴を覺えて水を飲まうとした。王は幸いに『清水の珠』を持つていたので、これを河中に投じて河の水を清めた後それを飲んだ。この如く佛の弟子達も、この濁世に清水の珠を投じて、この世を清淨ならしむるべし。清水の珠とはすなわち、誠信これである」

信ずることほど強いものはない。信仰には利害がない。ただひたすらに佛を信じ、佛にすがる。それが念佛である。念がその底をきわめれば、信がその頂點に至れば、諸事自ら無碍となり、萬事はみな玲瓏の光りにつつまれる。わたくし達の信ずる心、念ずる聲は、それが眞宗なものであるならば、感ずる心ある人、聞く耳を持つ人には必らず届き、自らに潤達の路が拓けてくる。この心をこそ「清水の珠」といわなければならぬまい。

(竹中)

◇流れる音は生きてゐる（會友の聲）

何氣なくスイッチを入れると佛教放送、途中からでも何でも聞く。心にしみるものがあると、誰かな、と新聞のラヂオ欄をみる。街を行きずりの耳に入るラヂオ、佛教放送なんだなと思う。特に關心をもたずとも、こうして宗教の聲が流れることによつて生きてゆくし、生きている。近頃、宗教放送の時間が第一から第二に變り、殊に聞き流した聲は生きていた、との感を強めた。もうよほど興味、關心をもたない限り第二にダイヤルを廻しはしない。日曜はキリスト教放送だけになつて、佛教は他の週日に廻つた。尙さら聞かれない。街に、家に淡々と聲は流れないからである。

この番組變更は明らかにいままでの宗教放送への不評の結果だと思ふ。かつて放送佛教の言葉さえ作り出し、朝の修養の時間が國民に親しいものとされたあの頃を顧みるときに、戦後のこの宗教放送は、佛教で言えばただ名士が入れ代りたち代りマイクに立つただけで、そこに一貫した流れは何もない。しかも前奏曲の勤行十五分、まさに逆効果だ。

その點先頃の眞野正順氏の連續放送は僅か四回だが好かつた之は私が淨土の讀者だからほめるのではありません。佛教放送もここらで軌道にのつたかと思つたら、第二になつてしまつたが、淨土はここに顧みて編集をねつて貰いたい。眞野先生の放送を活字にする計畫はありませんか。（愛知・山梨俊夫）

——同感です。企劃に御期待下さい。（係）

芝園だより

◎秋更けてますます内に省察する好季、本誌もまた深く信仰を内にみることにした。

◎眞野先生も健康に復され、筆硯新たに健筆をふるわれることとなつた。吉田・吹田兩氏の引つづいての御寄稿には只感謝あるのみ。

◎阿川先生の叙述には佛者と人の子との一枚になり切つたものが感ぜられる。今後このような味合いあるものをお寄せ下さるよう。編集子の無理を容れての増谷氏の出陣、御禮申します。尙寶田氏の玉稿、機を得ずして今日になつたこと深く謝意を表します。

◎目下、本誌に即應して、念佛信仰確立のために色々プランを立てています。淨土トラクトもその一つ。その他遠大の計畫を樹てて着々と歩み始めております。秋の好季、大いに御援助、御利用下さい。

◎野に町に、思想色は段々と濃くなつてゐる。佛者の、地についた底からの對策が望ましい。（竹中）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「淨土」 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿四年九月二十日印刷
昭和廿四年十月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門
東京都千代田區神田保町三ノ十

印刷所 共立社印刷所
東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替 東京八二一八七番
會費番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

爽秋におくる浄土トラクト

初めて書かれたお十夜の話
読んですぐ分るお十夜の話
史實に基いてのお十夜の話

藤田寛雅著

お十夜の話

一部四圓
送料六圓

早くも希望相次ぐため、申込は至急にお願いしま
す。申込順に送本します。

初版はすでに賣切。再版も残部僅少。

十部以下は切手代用拂込にてよろしいです。

送料五〇部まで二〇圓、百部以上當方負擔。

申込所 東京都港区芝公園五の一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二二八七番

佛教現代語譯の嚆矢！

佛教が眞に現代に生きて骨肉となるには
まづそのことばが充分に消化されねばならぬ。
今回浄土教の根本經典の現代譯が服部氏多年の努力
によつて完成した。

新選擇集

(人名書名
解説附)

服部英淳譯著

B6判上製 總頁二三〇頁
定價一八〇圓 送料二〇圓

從來の如き單なる漢文の書流しではなく
現代文口語體を以つて譯出された。

本書を通じて元祖上人の御信念に觸れられんこと
を。

東京都豊島區西巢鴨四丁目

發行所 大正大學 浄土學研究會